

第27回研究大会報告

● 自由研究発表 第1分科会 (10:00～12:00)

1 番目の発表は、阿部真隆・小田真代・田代暁子・渡邊優輔氏（筑波大学大学院）による「戦争遺跡活用の可能性—茨城県の戦争遺跡調査を通して—」であった。発表内容は、1年間の戦争遺跡の調査で、現地取材の重要性から地形図・写真・聞き取りの3点を用いて調査を行ったこと、戦争はどのような地域にも存在することの2点に触れたものであった。会場からは、調査を行う際、工夫した点はどのようなものかという質問がなされた。それに対して発表者からは、公民館や博物館に出向き、その場で出会えた人に直接取材を申し込み、調査内容を振り返るためにICレコーダを活用しつつ調査を行ったことが工夫した点であるという回答がなされた。また、司会者からは、学校教育の現場で地形図の活用を推進することの必要性についての提言がなされた。

2 番目の発表は、大高皇氏（筑波大学大学院）による「ドイツ・バーデン＝ヴュルテンベルク州の地理スタンダードの構成」であった。発表内容は、バーデン＝ヴュルテンベルク州における地理スタンダードの特質についての報告であった。この特質として、アウトプット指向としての獲得すべき能力の提示、ローカルテーマ的な地理教授、教材精選への回帰、といったものが示された。会場からは、ドイツの地理教育の重点が地域からの内容へと変化したのに対し、日本はなぜそれと逆行する傾向にあるのかという質問がなされた。それに対して発表者からは、前者は地理の内容を深めることを重視しているのに対し、後者は地域の理解を深めることを重視しているためであるという回答がなされた。

3 番目の発表は、梁炳逸・金玆辰氏（筑波大学大学院）による「高校生・大学生の地理的認識の日・韓比較」であった。発表内容は、2007年に日本地理学会が高校生・大学生を対象に行った地理的認識の調査とはほぼ同様の調査を発表者が韓国で行い、日本における調査結果と比較し考察したことについての報告であった。会場からは、韓国の社会科教育制度や地理教育の現状とは何か、日本と韓国の地理教育において重視される学習内容の違いとは何かという質問が出された。それに対して発表者からは、現在日本では地域を重視する地誌学習が行われているのに対し、韓国では課題や問題に対する因果関係の考察を重視する系統地理学習が中心に行われているという情報が提供された。

4 番目の発表は、中切正人氏（岐阜県立斐太高等学校）による「歴史学に地理学の視点を加えて歴史教科書の記述を相対化する論拠—歴史と地理の融合に関する一考察—」であった。発表内容は、歴史と地理は「視点の現在性」を共有している。そのことから、両科目を一つの融合科目として展開することが可能である。それによって教科書記述の相対化が可能である、という提言であった。会場からは、中学校の歴史教育と高校の世界史教育との融合はどのような形が想定できるのかという質問がなされた。それに対して発表者からは、歴史教育と地理教育を融合させて、周辺の国々から自国を学ぶことは、社会科教育の原点に回帰することになるのではないかという回答がなされた。

（文責：佐藤亜矢香・中牧正寿）

● 自由研究発表 第2分科会 (10:00 ~ 12:00)

第1の発表は、丹治達義氏（筑波大学附属視覚特別支援学校）、青松利明氏（同）による「視覚に障害のある児童・生徒のための点字地図帳の開発」であった。丹治、青松両氏は視覚に障害のある児童・生徒にとっての地図帳を用いた学習の困難性を踏まえ、点字による地図帳を地図編、統計編に分けて開発したことを報告した。質疑では、地理的分野以外での点字地図帳使用の可能性についてと、縮尺の指導をどのようにするのかという質問がなされた。前者に対しては、点字地図帳は主に地理的な分野で使用されているとの回答であった。後者に対しては、縮尺を重視した場合、対象の地域がページにうまくおさまらないことがあるので、それよりも形や位置関係を重視して教えているという回答であった。

第2の発表は、軍司隆行氏（筑波大学大学院）による「『個』の考察—ポストモダンの視点から—」であった。軍司氏はハイデガーの人間像を批判したデリダの思想から、社会科教育において求められる公民像を問い直すことを提言した。質疑では、研究を始めた動機に対する質問と、生徒にとって他者と同じように行動するという同質性とは、本人の思いに反して本人の所属する集団から要求されることではないかという意見が出された。前者に対して軍司氏は、教育学で扱われる生徒とは、一つの集団として扱われているが、生徒一人一人の違いに目を向けたいと考えたためと回答した。後者に対しては、同質性とは集団の他者から要求されるものではなく、教室という場において生成されるものであると回答した。

第3の発表は佐藤治氏（筑波大学大学院）による「子どもと高齢者の社会参加を支援する世代間交流プログラムに関する研究—川崎市立下布田小学校での実践から—」であった。佐藤氏は下布田小学校における「りぷりんと川崎」という高齢者による絵本の読み聞かせ事業を事例としながら、この活動が子どもと高齢者双方の社会参加をどのように支援しているかについて報告を行った。質疑では、他地域・他の学校との比較の視点が必要ではないかという指摘がなされた。更に、川崎市に見られる地域的な条件について質問があった。川崎市には活動の核となる市民のコーディネーターが存在し、その介在によって活動が円滑にすすんでいるとの回答があった。

第4の発表は唐木清志氏（筑波大学）による「アメリカ社会科におけるサービス・ラーニングの理論と方法」であった。唐木氏は、アメリカの社会科において子どもの市民性を発達させることをねらいとして行われているサービス・ラーニング（SL）の開発原理と実践事例をふまえ、日本でのSL導入の可能性について言及した。質疑では、SLに参加する生徒は、その活動の意義について理解しているのかという質問がなされた。これについて、振り返り（reflections）をしっかりと行う教師の実践では生徒もSLの意義を理解しており、生徒の理解度は教師の力量に依存すると回答した。SLを日本のカリキュラムのどこに位置づけるのかという問いに対しては、総合的学習の時間や公民や歴史などの単元に組み込むことが可能であるとの回答があった。

（文責：小林光海・佐藤裕美）

「社会科の精神と私」

谷 川 彰 英*

私は1986年に筑波大に來たのですが、ちょうど今年で24年間この大学にいたことになります。その間、最後に管理職とか副学長になった時期は別ですけども、数年前までは教育研究科のポストでした。まさにこの教育研究科が私にとって一番の故郷だと思っています。私が生まれたのは1945年ですので、ちょうど戦後の60数年と重なっています。そういうなかで、私の経歴と社会科というものがどう関わってきたか、私の社会科論とか教育論が、どういう人々との出会いによって生まれてきたのかということを話したいと思います。

「新教育」と私

敗戦を迎えまして、日本の文部省も従来の戦前・戦中の教育を払拭して新しい教育を作ろうとしていました。そういう意味で、この時期は「新教育」と呼ばれた時代でした。私の小学校時代と中学校時代の教育というはいったいどうだったのかと考えると、やはりその当時の新教育の功罪、つまりいい面と悪い面があったのだと言わざるを得ません。良い面は子どもが主体的に動くということですが、一方では低学力という問題がその後出されていくわけですね。私なんかは自分がその真っ只中にいて、やはり生きる力はあるわけです。でも、学力は低下したのか、してないのか、その辺のところは微妙ですね。数十年たった今から考えてみると。

小学校時代は学校で勉強した記憶がほとんどありません。本当に勉強というものをしなかったですね。学校に行くとかだいたい、「さあ、外へ出ましょう」とか言って、散歩したり、川に

遊びに行ったりしていました。冬になりますとね、松本というところは寒いところなものですから、PTAのお父さんたちが校庭に土嚢をこう置いて水を入れると、翌朝スケートリンクが出来上がっているんです。毎日、午前中はスケート。あんなことよくできたなと今は思います。でも、そういう時代だったんですね。時間でスケートリンクから上がって来いなんてことも言われなかった。

今みたいに、例えば45分とか50分とかで全部切っていくっていうことがなかったですね。例えば、10時15分になったらスケートリンクから上がって来いということもないんですよ。じゃあなぜ上がってくるかという、10時過ぎになると氷が解けてきてスケートができなくなるんです。そうするともうしょうがないから、子どもは上がってくるんです。でもそれは私たちの「生きる力」を育むものとしては、ものすごく良かったなと思っています。つまり、徹底してやれということを教わった感じがしますね。遊ぶんなら徹底してやれと。中途半端に遊ぶなということを教わった感じがしています。

当時の学校の先生方というのは、全国どこでも同じだったと思いますけど、新しい教育、民主主義の教育、平和を目指す教育ということで燃えていた時期ですね。すごいエネルギーを学校の先生方は持っていました。私が教育の道を選んだのは、小学校時代の先生方の影響が大変大きいと思います。

新教育の時代といっても、みなさん若い人には分からないかもしれないけど、戦争の痕跡というものが、実にたくさん残っていた時代で

*筑波大学副学長

す。私が小学校に入る前後は、戦争から帰ってきた村の人たちが、みんな白い服を着て、村を歩いていたという時代ですね。農家が野良仕事へ行く時も、何というんですか、軍隊の帽子みたいなのをかぶって野良仕事に行くとか。町へ行くと、手足を失った兵隊たちがハーモニカを吹きながらお金を恵んでもらうという光景が当たり前でした。そういったことは、私が大学に入る頃まで東京ですっとたくさんあったんですけど、やがてだんだんなくなってしまった。

私は実は村の菩提寺の息子として生まれたのですが、その寺には戦時中千葉県からの疎開児童が来ていました。もちろん児童が帰ってから私が生まれたのですが、気がついたころには千葉県からよく薩摩芋が送られてきました。その当時は一番食糧事情が悪い時期で、薩摩芋を送ってもらってありがたかったです。千葉県は薩摩芋の県だとすごくずっと思っていたのですが、いろいろ調べてみたら、青木昆陽が江戸時代にあそこで薩摩芋を作っているんですね。

私の伯父なんかも中国に戦争に行っていたんですが、その経験は一言も話さなかったです。相当ひどいことをしたんでしょうね。だからそれは話せないというのがやはりあったのだろうと思いました。

教育界は憲法と教育基本法が、ひとつひとつ掲げられて、多くの教育者はそこに期待をかけたんですね。その教育基本法が今回ろくに審議もせずに変えられてしまったことはとても残念です。本当に、憲法、教育基本法というものの存在が、日本の教育を数十年間支えてきたということが言えると思います。新教育の実態は先ほど言ったとおりですけど、平和とか民主主義という言葉が当時の日本の教育界、社会をリードしていたんですね。

社会科の話を後でしますが、社会科はその理念に則ったというか、そのビジョンにそってできた教科でした。今の日本のなかにそういうビジョンとして、それに代わるような言葉が

あるかという、ありませんね。日本の国をどうするのかという、これから例えば数十年後を見通した、教育だけじゃなくて、社会をどうするかというビジョンがありません。いまの首相にもないですね。

教育学を志す

私が教育という世界に入ろうと思ったのは、実は高等学校時代のころでした。私の学んだ高等学校は松本深志高等学校という学校でした。この高校は長野県で一二を争う古い学校だったのですが、その学校にずっと伝わっている伝統というものを、私は受けてきました。学校というのは、私はいい意味で伝統とか価値というのを持つべきだと思っています。

初代の小林有也先生は、20年近く校長をやった人です。1914年に亡くなっているのですが、この先生が亡くなるときに、残した遺訓というのが、生徒のなかにずっと伝わってまして、3つあるんですね。

「諸氏はあくまでも精神的に勉強せよ」

「而して大いに身体の強健を図れ」

「決して現代の悪風潮に染まり堕落するがごときあるべからず」

この3つのことを言っていて亡くなったそうです。この遺訓が松本深志高校の生徒のなかにはずっと伝えられているんです。必ず先輩が後輩にこの言葉を伝えていくことになっている。簡単に言うと、とにかく勉強しろということと、体を丈夫にしろということ。そして、悪いことはするなということなんですが、よくよく考えてみると一番、二番は、誰でも言うことじゃないですか。問題は三番目です。悪風に染まることなかれというこの小林有也先生の考え方は、不思議にこの学校の生徒には伝わっておりましてね。私の知っている範囲ではうちの高校の卒業生で相当悪いことをして捕まったというのをあまり聞きません。私はそういう意味では高等学校というのは、人間の形成の場所としては一

番大事だと思います。

それで、私がなぜ教育学を学ぼうとしたかという話をしましょう。私が在校しているときの校長先生は岡田^{はじめ}甫という先生でした。私が教育の道に入ろうと思ったのは、高一のときのちょうど今頃ですね。11月頃です。正門のところに行ったら岡田校長が向こうからやってきましてね、「おはよう」って声をかけてくれたんです。それで決まりです。なぜか。生徒から見るとその岡田先生というのは神様みたいな存在だったんですね。とにかく、言ってることが分からない。言ってることが分からないんだけど、なんとなくすごいことを言っているらしいという話です。

岡田先生は、広島で原爆の被害を受けて、そして長野県に来て、校長をやったんですけども、聞くとところによると、東大で教育学を学んだという話でした。私はそこで初めて、あの先生は神様だけど、教育学らしきものをやっていたらしいということを知ったわけです。

岡田甫先生の一言で、私は教育学をやろうと思ったわけです。それから1年ほど勉強するうちに、高校教育について疑問が生まれてきたのです。それは「やりたくもない勉強をなぜやらなければならないのか」という疑問でした。本来教育とは自分がやりたいことをやって伸びていくことじゃないのかなと思っていました。そこで、本屋さんで教育学に関する本を探しました。そこで見つけたのが、篠原助市という、日本ではトップの教育学者が書いた『教育学』（岩波全書）という本でした。

読んでみたら、教育とは何ぞや、と書いてある。教育とは現在あるところから、ある次の高いところまで上げることなんだと書いてある。そこで私は、へえ、じゃあうちの高校の教育は教育じゃないんだと考えました。だって、うちの高校の教員は、自分があるところから上げるなんて努力はしてないし、これをやらなきゃだめみたいな感じで押し付けられるだけだから、

やっぱり何かおかしいんじゃないかと。日本の教育を改革したいという思いを、その当時、高校2年生の今頃ですね、意識を固めまして、じゃあ教育に行こうと心に決めたわけです。

東京教育大学での出会い

東京教育大学の教育学部教育学科という「教育」ばかりつくところに入りました。倍率だけはすごく27.6倍でした。この数字だけは覚えています。

私にとってはすごく大きな出来事は、梅根悟先生に出会ったことです。出会った、というよりは、1年生のクラス担任だったんですね。この先生はとても大変な人で、広辞苑に教育学者で何人かしか載っていない人のうちの一人です。1980年に亡くなられたのですが、元は西洋教育史で、コア・カリキュラム連盟というのを戦後作ったりして、戦後の新教育の神様のような存在でした。和光大学の学長になられるということで、私たちが2年生になるときに、新設された和光大学の学長として行かれてしまった。

ある時、授業の一環として、梅根先生は私たちを和光学園に連れて行ってくれました。

私の教育観の中には2つの矛盾するファクターがあって、一方では、子どもたちの主体性とか、子どもたちの問題解決的な学習とかを大事にしたいという気持ちがあるベースにあります。それは高校時代の問いが、なぜ自分がやりたくもないことをやらされるのかという、基本的な問いから発しているからです。ところが、和光学園の授業を見ていて疑問が湧いてきました。たしかに子どもたちのことは尊重しているんだけど、こんなに子どもたちに任せてばかりの授業でいいのかという思いでした。

これは矛盾した言い方ですが、高校時代に私が受けた教育は、生徒無視みたいな授業もあったけれど、とても良い授業もあったわけです。難しいことを教えるんだけどすごく感動を与えるような先生もいました。

授業を見終わって、学校の先生が質問がないかというから質問しました。たしかに子どもたちは一所懸命やっているように見えるけれども、こんなことで力が付くんですか、と。やはり勉強というのは、もっと我慢して辛いことでも耐えなくちゃならないこともあるんじゃないですか、と。すると、梅根先生はあとで「さすが教育学科の学生だ」とほめてくれました。これは嬉しかったですね。

唐沢富太郎先生は直接の恩師でもないのですが、大きな影響を受けました。専門は日本教育史で、自宅に教育博物館を作った人ですが、私がこの先生に教わったことは、古本屋で値切ってはいけないということ。例えば10万円の本だったら、10万円ぽんと出せと言うんです。それを8万円とか、9万円にしてくれっていう風に言ったら駄目だと。これはなるほどなと思いました。要するに気前よく払ったら、古本屋の旦那さんは、その先生の名前を覚えておいてくれるわけです。そして、何か良い本が入ったら連絡をくれると言うんです。

私のやや専門的なところで言うと、地名研究で明治時代の人に吉田東伍という人がいます。『大日本地名辞書』という世界遺産的な本を作った人です。独学で12年間もかけて世界的な業績を残した学者です。唐沢先生はこの吉田東伍と同じ新潟県の出身です。とにかく、このクラスになると大物です。一冊の本を普通私たちはページ数で言うんですけど、唐沢先生の場合は何キロというんです。5キロとか10キロとかいう。すごいエネルギーをこの先生からはもらいました。

それから、唐沢先生からはもう1つ学びました。自分で本を書いたら、印税が入ってきますね。それで印税が入ったらそれを次の本に回す、注ぎ込む。つまり、資金を回転させるということ、教わりました。私が今やっているのはそんなことで、書いた本で印税が入ったら次の著作に回す。その回転させるということを教わっ

た人です。

家永三郎先生はご存じの通り日本史の先生ですけれども、私の下宿から大学へ行く途中に家永先生の家があって、いつも先生の家の前を通って、大学まで通っていました。1965年ですから、ちょうど、私が大学2年生の時に、教科書の訴訟を起こしました。一般教養の日本史をとったんですけど、大変な人気でした。しかし、何をやっているかという、裁判に出した原稿を読んでいるだけなんです。学生は必死になって写すだけ。今考えたらそんな教育ってないだろうなと思いますね。教育方法としては最低の教育ですよ。でも、やっぱり怒りをもって語るその語り方に、学生はえらく共感・感動していました。

「社会科」との出会い

東京教育大学に入って、社会科というものに巡り合いました。この巡り合いが私の人生を変えました。長坂端午先生は、五月五日の端午の節句に生まれた方です。この先生は1947年、昭和22年の最初の指導要領の小学校版を作った先生です。それを作った直後に東京教育大学の教員として迎えられて、それからずっと退職までおられたのですが、この方は実は変わり者で、旧制の一高から東京文理科大学が最初できるときに、こちらに移った。普通、一高だったら東大に行くんですが、東京文理科大学に行った。なぜ行ったかと言ったら、就職がなかった時に、田舎の信州諏訪で代用教員をやって、教育の面白さが分かったという話です。

馬場四郎先生も私たちのクラス担任だった方ですが、この先生はもともと教育社会学でした。中等の社会科を担当した人です。なぜこの馬場先生は大事かという、社会科教育を研究している研究者のなかに、社会学を背景にした人はほとんどいません。歴史とか地理とか経済とか、法律とかはあっても、社会学を背景にした学者というのは非常に少ないですね。そうい

うなかで、社会学的なアプローチで社会科を構成したという先生です。馬場の社会科か、社会科の馬場かと言われたくらいの人です。

上田薫先生は現在も御存命なのですが、西田幾多郎のお孫さんに当たる方です。西田幾多郎の娘さんが上田家にお嫁に行き、その息子として生まれました。京大に行き、戦地に行き、帰ってきて行くところがなくて文部省の役人になったということで、1951年の小学校の社会科を作られた人です。私は後で申しますが、自分を変えた、自分に最も大きな影響を与えてくれた3人の先生のうちの一人がこの上田薫先生です。

先生との出会いは『知られざる教育』という本でした。この本は、池袋の東口に新栄堂という本屋さんがあったんですけど、その2階の教育書のコーナーで見つけたのです。この本を手にして、一気に上田薫のファンになってしまいました。なぜ「知られざる教育」なのかということですが、これは「社会科」のことなんです。「知られざる教育」イコール「社会科」です。つまり、社会科という教科は、あるいはその教育は、ずっと知られなかったと主張しているわけです。1958年、昭和33年です。昭和33年というのは、ちょうど指導要領が変わる時期です。昭和22年、26年、30年、33年と変わってんですけど、ちょうど社会科の、初期の社会科の本質が変えられていって、そして、ようやく系統的な学習に移ろうとしたとき、その間の10何年間あまりを見ていて、上田先生からすれば、自分たちが作った社会科の理論は誰も理解してくれなかったということを言いたかったんですね。

私の作品(1)

私の書いてきた本の中から5冊を選んで紹介したいと思います。これは皆さんがよく手に入らないと言っている本です。『社会科理論の批判と創造』です。これは1979年に明治図書から出し

ました。1977年がちょうど社会科30年の年だったのですが、明治図書の雑誌に一年間連載をしたものがベースになっています。テーマは、「社会科における生活と科学と認識」でした。当時も編集長は樋口雅子さんだったのですが、彼女が、手を抜かないで、思いっきり、本格的に書いてくれということで、思いっきり難しく書きました。でも、思いっきり難しく書いた割には、よく売れました。内容がかなりラディカルだったからです。

当時「科学と教育の結合」を主張していたのは教育科学研究会(教科研)という民間教育団体でした。それに歴史教育者協議会(歴教協)がありました。昔の歴教協は相当イデオロギー性が強くて、やはり科学、科学と言っていました。そこで、私は、あなた方が言っている科学というのは何ですかと、正面から批判を書いたのです。

60年代というのは本当にイデオロギーで真っ二つに分かれていた時代でした。ですから、もちろん、教科研とか歴教協は、日教組よりの教育団体として存在したわけですね。

一方、上田先生たちが作った初期の社会科というのは、真ん中あたりだったのです。この「批判と創造」というのは、初期社会科の理論というものを批判するにせよ何するにせよ、とにかく正対しろということでした。単なるイデオロギーで、「這いまわる経験主義」といったレッテル貼りでもやっていても、理論は絶対深まりませんよ、という話でした。これは、教科研にはとくに名指しでやりましたので、相当効いたと思います。歴教協についても相当批判しましたので、歴教協からはあの本に対して反論しなきゃならないという声は聞こえてきたのですが、結局両者からは反論はありませんでした。

やはりこの本はこの時期に書いて良かったなと今は思います。私が33歳のときの本ですが、非常に早い時期に刺激的な本を出したものだから、その後、いろんなところに行って私の顔を

見ると、え、そんな若い人だったの、ということが多かったですね。相当年寄りだと思われていたみたいです。

しかし、この本には実は一定の限界があるのです。何が限界かというと、これは小学校の社会科というものを中軸に据えて書いているということです。

私の作品（2）

私の作品の2番目は『地名に学ぶ』（黎明書房）という本です。この本が1984年です。千葉大から筑波大へ移る直前にまとめた本です。私が地名というものをなぜやるようになったかという、実は「地図大好き少年」であったことに由来しています。

小学校5年生から6年生にかけて、私は家に帰っては地図帳ばかり見ていました。先生が読めと言ったわけでもない、親が読めと言ったわけでもないところがポイントなんですけど、自分が好きだから読んだ。何ではじめ地図に興味をもったのか。棒グラフですね。棒グラフというのは、山のような形をしています。だいたい私たち戦後生まれの人間というのは、高い棒のほうが良いという意識を持っていました。生産高でも、車の生産数でも、高いほうが良いという。

千葉大に赴任してとき、地理の先生で清水馨八郎という先生がいました。清水先生がたまたま教授会のときに、「谷川先生、東京ってのは地名で地形がわかるんですよ」と話してくれたんです。低いところは、橋とか、日本橋とか、浅草橋とかいう地名がある。つまり、堀とか川があるから、橋が多いんですね。ところが山のほうに行くと岡とか、大岡山とか、山にちなんだ地名がある。その両者を結んでるのは坂なんですよ、と説明してくれたのです。まさにそのとおり。そのときパッと浮かんできたのが、十数年前の地図大好き少年の姿だったのです。

実はもう1つ、私の地名研究は大学教育の必

要から生まれたとも言えるのです。それはどういうことかということ、千葉大で担当していた授業には講義と演習とがありまして、簡単に言うと、演習で教材開発した授業を講義で事例として活用するといったことでした。だから、私は自ら小中学校で授業をやるということをしてきました。演習で開発した授業を講義で活用するというシステムは当時なかったと思います。今はかなり一般化してきているようですが。

実はその頃、谷川健一先生と出会うことになります。この人は同じ酉年で、24歳上ですから、今年85歳くらいですけど、1981年、「地名を通して日本を考える全国シンポジウム」というのをやりました。ちょうど私が地名の研究を始めたばかりの頃で、それで、じゃあ行ってみようかと川崎に行ったんです。そのとき私が本当にびっくりしたのは、地名は翠点であると彼は言ったんですけど、翠点というのは、いろんなものを寄せ集めてる天空の点みたいなものなんです。あらゆる学問分野、例えば、もちろん地理学者も歴史学者も民俗学者も文学者も歌人も全部入って、地名というたったひとつの小さなものなんですけど、そこにあらゆるジャンルの人が集まって、シンポジウムをやった。

谷川先生との出会いも不思議でした。先生の一言で私は動いたんです。このシンポジウムで私は地名というものを教育で考えているという話をしたのですが、そうしたらね、ある晩、突然、谷川健一先生から電話がかかってきたのです。谷川健一先生は二周り違う、24歳違う私のことを、「谷川先生」って言うんです。え、こんな大先生がね「谷川先生」って呼ぶんだという風に思って不思議でした。私から見れば岡田甫校長みたいな神様みたいな人ですから。神様からお声がかかったということで、私は地名研究所に足繁く通うようになったという次第です。

私の作品（3）

3つ目の作品は、『柳田國男 教育論の発生と継

承』という本です。これは学位論文をまとめたもので、96年に三一書房から出されました。皆さんもいろいろ研究をされているわけですが、私が自信を持って言えるのは、この学位論文の根幹になった、というか、中核になったものは一カ所しかないということです。この一つの発見が、学位論文につながったということです。いったいそれは何だったのかというと、千葉大に行ったばかりの頃の29歳ころの話です。そのころ『文明と伝統の授業』という本を書いたのですが、その作業のなかで「農政学時代における社会科の原型」を発見したのです。

それはね、どういうことかと言うと、その当時まで、柳田國男という民俗学者が戦後に出来た社会科にコミットしたということは、何人かの人が研究していました。戦後なぜ社会科にコミットしたかということ、実は彼は成城学園に家がありまして。成城学園にいて、息子さんの為正というのが、その後お茶大の教授をやるんですけど、為正が成城学園の初等学校に入っていたんですよ。それで初等学校の先生方と多少コンタクトがあって、そういうなかで柳田國男は、戦争が終わって、ようやく、いま、新しい社会が来たときに、新しい国を作るためには社会科しかないんだと考えました。

昭和26年に、柳田國男が編集した、日本で最初の『民俗学辞典』が東京堂から出されました。その序文を柳田が書いているのですが、その中身はすべて社会科教育のことです。民俗学をなぜ体系化しなければならないかと考えたときに、彼の頭にあったのは、社会科という教科に知識を供与する、与えるために、民俗学の学問体系を作らないといけないという考え方だったのです。

だから昭和の20年代、柳田國男のお弟子さんたち民俗学関係者が、盛んに社会科教育に発言をしてるんです。例えば和歌森太郎先生は、まさにその通りで、柳田國男と和歌森太郎先生は、『社会科教育法』という本すら書いてるんです。

ここで、話を戻しましょう。農政学時代に書いた本を見ると、後の社会科に近い考え方が書いてあったのです。これが私の最大の発見でした。例えば、居所を中心とした地理と書いてある。明治の30年代くらいは、地理というとなみな遠隔の地に興味をもっていて、そういうことばかり教えていると指摘している。

それから歴史にしても、みんな遠い昔のこと、中央の歴史ばかりやっている。自分が住んでいる、現代を中心とする教育がなっていないと批判をしています。これはまさに「社会科」の精神です。地理も歴史も経済も、やはり自分たちの住んでいる地域あるいは生活圏というものを、もっと大事にしなければだめだ。この考え方は、戦後の社会科の考え方です。だから、ここで初めてわかったのは、農政学時代にすでに柳田國男は戦後の社会科と同じ考え方を持っていたということです。だから、彼は戦後、社会科が出たときに、社会科に対して非常に強い関心と、期待をかけた。これはやっぱり凄いことだと思いますね。

その文章のなかに「注意心」の養成という言葉がある。これが後になって歴史教育の目的として「史心」という言葉を考えるきっかけになっています。

それから一つ大事なことはね、当時の社会科の考え方と微妙に違うところなんですけども。先ほど言った問題解決とか、問題という言葉を使ったんですね、社会科では。問題解決法とか。Problem Solving Methodとか。Problem Solvingなんです。だから問題解決というのはアメリカの言葉ですけども、それを問題解決と日本語の言葉に訳して、問題解決学習とか言っていました。ところが柳田はですね、問題は違うんじゃないかというんです。疑問のほうが大事だって。このことについて、その当時、中等の社会科を担当していた東大の教授の勝田守一さんという人がいたんですが、勝田先生と柳田國男が対談をしてるんですよ。勝田さんは文科省の役人です

から当時、やっぱり問題解決だというんですよ。ところが柳田國男はそんなことはない、問題なんていうことよりはむしろ疑問が大事だと。この議論はものすごく面白くて、私もやはり「疑問」だと思いますね。よく社会科の授業でも「問題」といいますが、結局先生が勝手に問題を作って解かせているだけにすぎないことが多いです。ところがね、疑問というのはね、もっとパーソナルな問題なんですね。個人の、自分の生活経験のなかで、疑問を持つか持たないか、これは大きいですね。だから、社会科で何を教えるかということももちろん大事だけれども、どういう風に疑問をもてる子どもを作れるかこそが大切だと考えたい。

私が歴史に興味を持ったのは大学生になってからなんです。これは残念なことです。小中学校の社会科の授業で歴史に興味を持つということはありませんでした。

小学校時代、私の家から学校までは2キロくらいありました。小学校6年間通いましたが、高学年になったころ、不思議だなと思ってきたことがありました。バス道路を歩いていたのですが、それとところどころ交差するようにやや小さな道が通っているんですね。これは何の道なのかという疑問をずっと持ち続けていました。中学校になると、スクールバスで通うようになったので、その疑問はそのままになってしまいました。

ところが、大学生になってから、偶然にうちの檀家で、かつて村に住んでいて、その後町に引っ越された方ですが、その人が昔の村のことをいろいろ話してくれました。結論的にいえば、私が気になっていたのは昔の街道筋で、私たちが小学生のころ歩いていたのは、今風にいえばバイパスみたいなものだったんですね。これは驚きでした。初めて歴史というものを身近に感じました。こんなことをもっと小学生時代に経験していたら、私は歴史学に進んだかもしれません。

私の作品（4）

『地名の魅力』（白水社）というのは、なぜ私のなかで大事かというと、地名というものを、自分のライフワークにした最初の本なんですね。だから、これ以降、地名の本を書いていくことになります。この本が私にとって重要な意味を持つのは、私の作品のなかでたぶん初めての一般向けの本だったということです。それまで書いてきたのはもっぱら学校の教師向けの本で、いわゆる教育書というものです。

ところが、柳田國男の研究を学位論文としてまとめたあたりから、教育書に対する疑問が出てきたのです。この点を詳しく話す時間はありませんが、その後の私の著作を見ていただけると、この本の持つ意味は理解していただけるでしょう。

私の作品（5）

これが5つ目なんですけど、皆さんの交流した人たちもたくさん協力していただいて、こういう本にまとめました。『日韓交流授業と社会科教育』。これはちょうど1995年から2005年まで8年間続けた実践記録です。これをやった背景はですね、簡単に言うと、学生と一緒に勉強しようみたいな感じでやったんですね。千葉大時代も実は演習で教材開発したものを講義で使うということをしてましたけど、大学院で、しかもそれぞれの専門分野の人たちがいて、それを何か海外でやってみようということになって。たぶんその当時はですね、学生を連れて行くということはあったにしても、学生が現地の高等学校で授業をやるなんて誰も考えなかったんですよ。それは、そういう意味では、先鞭をつけたという風に私は自負しています。

当時は日韓問題も大変な時期でした。1995年は竹島問題、独島問題が起こった時で、どんなに授業をやっても、どんなに良い授業をやっても、授業のあとの質問は独島問題をどう考えるかという話なんですよ。だから、授業の内容は

関係ないの。竹島はどうだ、竹島は日本のもの
だと思っているのかとか言っ。そういう質問
ばかりでした。そういう状況のなかで、地道
に、授業で勝負できないかと考えました。授業は
ひとつの価値観を、あるいは結論を教え込むわ
けではないので、生徒が考えるということ、
どこかでやってみよう。ということと、とにか
く現実に触れること。当時は日本のほうが多少
お金があつて、日本の学生は韓国に行くことが
できたんですけど、当時は韓国の学生は来られ
なかったんですよ、お金の問題で。我々は比較
的安く行けたので。本当に往復の費用が2万円
か3万円くらいで。航空運賃だけはね。それで
授業をしてきましたが、それだけじゃなくて、
うちの学生は現実に触れることができました。
本当に生の韓国の人たちとか生活に触れて
みるということがとても大事だし、逆も大事だ
し。そして、未来に賭けるということをやりたい
ということで、結局8年間やりました。その
学生諸君が、現場に行つて、またそういう形で
次の世代に教育をしてきているようですの
で、すごくこれは良かったなと。いろいろなこ
とが本当にあつたんです。食中毒事件が一番大
きかつたんですけど。これが一番、大変だつた
ですね。でも、やって良かったんじゃないかと思
います。

この本は私の本のなかでは特に売れているわ
けではないのですが、一番高い評価を受けてい
る本です、書店関係では。5つ星ですね。僕の
本のなかで、5つ星になっているのは、この本
ともうひとつの本だけしかない。そういう意味
では、学生の皆さんの本当の努力がここに集約
されているという感じがいたします。

「社会科」はアメリカで生まれた

そろそろ「社会科はアメリカで生まれた」と
いうところにいきます。このことは、とくに若い
学生のみなさんにも知っておいて欲しいこと
です。そもそも社会科が生まれたのは20世紀の

初頭でした。社会科は1916年くらいにアメリカ
で生まれているんです。その背景はいろいろあ
るんだけど、移民の社会で、いろんなバック
グラウンドを持った人たちが集つた社会であつ
たということと、工業化や都市化が進んでいた
ということがあります。そういうなかで、Good
Citizenship というのを作らなくちゃいけないと
いう要請があつて、要するに、あるひとつのビ
ジョンが必要だつたんですね。つまり、都市化
が進み、移民が増えていって、そして社会が可
なり混乱していくわけですよ、犯罪も増えてく
るわけです。そういうなかで、じゃあどうい
う人を育てたらいいのかという理念がどうしても
必要だつたんです、社会科が生まれたときには。

次に、アメリカの社会科と日本の社会科、決定
的に違うところは何かといつたら、アメリカは
中等社会科から始まっているということです。
日本の社会科は初等から始まっている。だから、
合わないんです。もともと発想とか出発点
が違うんです。そのところが、現在60年たつ
ても、克服されているとは思いません。

どういうCitizenshipを作つたらいいのかとい
うことを社会科は問題にしてきたわけですが、
社会的特質から言つたら、私は個の確立という
か、自分というものがいったい何なのかといふ
ことについての決定的な確立というのは、アメリカ
にはあつたと思います。後で言いますが、日
本では個というものは、非常にか細い状況でし
た。自分で意思を決定していくということが、
アメリカ人はできるけれども日本人には難しい
のは、江戸時代以降ずっと今までの歴史の流れ
のなかで見たときに、日本では共同体のなかで
どう生きるかということが問題だったからです。

それから、価値の多様化の許容というのが
あつて、要するに、価値の多様化というのはどう
いうことかといふとね、これは後でまた出てく
るかなと思います。日本には先ほど申し上げ
たように、民間教育団体というのがあつて、
いまはもうかなり柔軟化された状況ですけど、

当時は文部科学省の立場、それから教科研の立場、歴教協の立場、いろいろありました。そういうなかで、結局、日本の社会って面白いですよ、同じような価値観を持った人たちが集ってくるんですよ。グループを作るんです。このことがね、社会科という教科を考えると、かなり私は根本的問題、つまり日本の社会には根づかない部分だと思います。つまり、社会科というのはね、基本的には多様な価値を持った人が集り、そこでどういう社会を作るかという話なんです。ところが、日本の社会は自分と意見が違う人は分けてしまっ、自分と同じ考えの人だけ集るんです。そういう社会は、別に悪いとは思わないけれども、しかし社会科の趣旨からすると、やはり反するんですよ。みんなそういう傾向があります。分かりますでしょ、同じ考えの人だけがこう集って一緒に研究会をするという。すると、私が最初『社会科理論の批判と創造』で批判したように、自分のところだけ甘くて、外から言われても何も言わないとか、という話になってくる。そうじゃなくて、社会科というのは、価値が自分の価値観とは違う人がいても、その人と良い共同体を作っていく。それが社会科なんです。

そこで、共同社会、未来社会ということですが、未来志向ということが私はアメリカに行っ、て本当によく分かりました。アメリカ人というのは、過去のことをあんまり聞かれないみたいなんですよ。私の限られた経験でいうと。アメリカに何度か通っているなかで、私はなるほどなと思いました。彼らは自分のルーツを辿られるとやばいことが結構あるんですよ。ヨーロッパで生きて行けなかったから来たとか。日本で食えなかったから行ったとか。そういうことを考えると、あんまり過去のことを考えるというよりは、未来をどうしようという考え方をするんですよ。向こうの学生たちと話をしてもそのことを非常に強く感じました。あなたの過去はどうだったとか、そんなことはあまり

お互い聞かないですね。むしろこれからどうしようか、意見は違うかもしれないけど、これからどうしようかという話をする。そういうスタンスに、私は実際行ってみて、随分と学びました。

民主主義というのは何なのかということが私はずっと分からなかったんです。アメリカでちょうどNCSSという学会があって、その編集委員をしていたこともあります、学会のメンバーと会食していたときのことです。10名くらいの会員で食事をしていました。当然アルコールも入っているわけです。そのとき気づいたのは、アメリカ人というのは、どんなに飲んだ席でも、誰かが話すときちんと耳を傾けるということでした。ああ、これが民主主義なんだと実感しました。日本ではたぶん、酒の席では人の話を聞くことはないですね、10人もいると。

社会科の精神（1）

昨日から今朝にかけて社会科の精神をまとめて体系化しようと思ったんですが、そんなことやってもしょうがないなと思って、結局、私なりに強調したい社会科の精神とはいったい何かということをお話したいと思います。

まず、価値の多様性。先ほど申し上げたように、民間教育団体、これなんかも実はね、今から20年ほど前に、1980年代の半ば頃に、アメリカと日本の社会科の、当時初めてだと思いますけど、シンポジウムを、共同研究をやったんですよ。そのときにアメリカ人がすごく興味を持ったのが民間教育団体だったんです。アメリカには無いから、そういうものが。つまり、民間教育団体というのは、同じような考え方を持った人が集ってひとつのグループを作るという発想ですね。いまは先ほど言ったように崩れてますけれども、そのときは強くあって、それを説明したら、アメリカ人はすごく興味を持ったんですね。良いかどうかは別としてね。

それから異業種との交流というか、自分達の世

界と違う人たちとの交流っていうのを認めていく。やはり差別に繋がるんですね、価値を一元化していくと。私は差別の問題を克服していくためにも、価値の多様性は大事だと思います。つまり、考え方は違っても、同じテーブルにつくということです。これはなかなか日本人には出来ないですね。私は社会科をやる以上、考え方が違ったとしても、同じテーブルについて話し合いをするということが基本だと思うんです。だから、ある考え方だけを排除するとか、そういうことは社会科の精神に反するんです。どんな考え方だってそれなりの根拠はあるんだから、みんなで考えて、より合理的な結論に行こうという風にすればいいんです。

二つ目はですね、正確な知識と言葉ということです。これは柳田國男が言っている言葉のなかに、社会科は人が正しくかつ安らかに生きるためのおおそ有用なものの全部あるいは安全なる証拠なる事実を教えるべきだ、というのがあります。これは先ほど申し上げた、『民俗学辞典』のなかに書いてある言葉です。要するにね、正確な知識というんだけど、柳田國男は、彼の学問性そのものが実証的なんです。だから、事実即ち形の実証的な知識を伝えなくてはならないということを彼は強く言っていました。私はあえて認識という言葉を使わなかったんですが、認識という言葉は大きすぎるからです。まずは正確な知識を持つようにすべきではないかと思います。

それから、他人の意見と自分の主張というのをきちんと尊重するということですね。どうしても日本の社会では、自分の意見と違うと避けるということがあるんだけど、何か違うんじゃないかと思います。夫婦をやっていると意見が違っても逃げられないんですけど、お互いに。ところが、学校や大学では、自分とは意見が違う人とは、会わないとか、会わないようにしたほうがいいのか、そんなことがすごくあるような感じがします。私は人格の尊重とか民主主義の

本質とかいうのは、他人の意見は尊重する。しかし自分の意見はきちんと主張する。だけど自分の主張に誤りがあったら直す、そういうことではないかと思います。コミュニケーション能力というのが大事なという感じがしますね。社会科が出来た頃はそんな言葉はなかったんですけど、最近で言えば、コミュニケーション能力。

社会科の精神（2）

学問への一生の関心ということを柳田國男は言っています。とくにこの言葉を皆さんに送りたいんですけど、「史心」という言葉を彼は使っています。彼は歴史教育の最終的な目的を史心の育成という風に考えているんですね。史心というのは何かというと、歴史に対する心なんです。歴史は移り変わっていくとか、変わっていくときは因果関係があるとか、あるいは発展性があるとか、そういう歴史を捉える心というもの、歴史教育の中核的な目標に置けと彼は言うんです。私は先ほど注意心という言葉を使いましたが、例えば、これは音楽だったら音楽心でもいいんですよ。言葉だったら言葉心でもいいし。例えば、歴史に対して、歴史って面白いなと思うことがあったら、それは大事にしないといけない。私の場合、史心を感じたのは、先ほど言った道の話ですね。大学生時代に、ああ、これが歴史なんだと思いましたよ。どんな本を読むよりも、これが歴史だよと。こんなに面白い歴史を20年間も知らずに来たのかと思いました。

それから、教育の目的とは何か。私は^ひ灯を点すことだと考えています。簡単にいうと、私の小学校5年生、6年生のときの地図大好き少年のなかには、灯が点ってたんですね。それは強制的にやらされたわけではなく、自分が好きだったんです。学問というのは、結局、灯を点すことだと思います。教育もそうだと思います。世界史でも、地理でも、何でもいいんですけど、や

はり、あ、経済って面白いとか、地理って面白いとか、歴史って面白いとか、そういう風に生徒が自ら思っ灯を点けたものは、いったん点いたものは消えないですよ。これが大事です。点いた灯は消えないけれど、点けた灯は消えるんですよ、意外と。点けたと思っても、先生が一所懸命点けたと思っても、消えるんです。だけど自分が点けた灯は消えません。

私は日社学の会長もやっているんですけど、この2、3年前まで、この社会科教育学会のなかに、非常に浅はかな、具体的には申しませんけど、非常に浅い考え方で授業づくりをしている人たちが多かったんです。私は、こんなのだったら社会科なんていらなと思っていました、ずっと。でも、この1、2年変わってきました。全国の社会科の授業の考え方が。それはどういうことかというね、「社会科を」なんとかするのではなくて、「社会科から」考えようという話なんです。つまり、一時間の授業をどうするかということは、当然大事なことなんだけれども、一番大事な問題は、教師自身が、社会科という枠を超えて、その中から国家とか人間とか社会の在り方を考えることです。例えば、ひとつの例をいうとね、今度テロが起こったじゃないですか。ああいう問題を今の子どもたちにどう考えてほしいのか。どう考えたらいいのか。私は日本の社会は非常に厳しい状況に置かれていると思うんですね。いまの政府の政治の状況も、非常に危うい。そういうなかで私は、社会科の教師というのは常に、「社会科を」どうするかだけではなくて、今の子どもたちとか国家とか社会とか、そういうものが一体どうなっていくのか、そういうことに対する目配りをしていく必要があるのかなと思います。

これから

最後に、これからですけど、これからというのは私のこれからです。1つ。時間を取り戻す。この9年間、非常に嫌な仕事ばかりさせられてき

ました。楽しいと思ったことがないわけではないけれど、しかし、何で私がこんなことをやらなくてはならないのかと思いながらしていました。95対5というのは、時間です。自分がやっている仕事の95%は公のためでした。自分のことは5%でした。これからは95%自分のためにやりたい。あと5%は皆のためにやりたい。こう考えております。

人生を変えた出会いは、上田薫先生と谷川健一さん。矢口高雄さん、この方はマンガ家です。今日は矢口さんの話をしておりますけれど、この3人の先生方との出会いが私を大きく変えています。変えているというか、支えてきました。そして、直接会ったことはないんですけども、柳田國男先生は、本当に私の恩師のような存在です。

これらの先生方にたまたま共通するのは、実は文学だったんです。文学というと、実は私の人生のなかで、1年間だけ浪人をしているときがあります。大学の学部が終わって、大学院に入るときに1年間遅れているんです。なぜ遅れたか。4年生のときにドイツに行って、そして私はドイツ語が得意だったので、ドイツ文学をやるか、教育をやるかで迷いました。ドイツから帰ってきたときに、先ほど申し上げた馬場四郎先生がクラス担任で、その馬場先生が酒の座席で男だったら一度決めたことはやれと言うから、じゃあドイツ文学やりますと言ったんですが、帰って来てすぐだったので、ドイツ文学の大学院は見事に落ちました。それで1年間勉強して教育に戻ったんですけど、でもそのときにもすごく悩んだんですね、教育にいくか文学に行くか。そんなこともあったので、いままで教育をずっとやってきましたし、ちょっと文学の香りする世界を体験してみたいなというのがいまの私の気持ちです。

筑波大と教育研究科へ本当にお世話になりました、まだどうなるかわかりませんが、中途半端な状況を数年過ごしてきましたので、

会長もしかるべき時期に降りて、しっかりバトンタッチをして、あとは皆さんに次の世代の子どもたちを育てていっていただき、そこに自分

の灯を点けていただけると大変ありがたいなと思っています。ちょうど時間が終わってしまいました。ご静聴ありがとうございました。